

# 討論

コメンテーター：林 行夫

(京都大学地域研究統合情報センター)



○宇山智彦 短い休憩時間で申し訳ありませんでしたけれども、コメントと、それを受けての討論に入らせていただきます。

コメンテーターは京都大学地域研究統合情報センターの林行夫センター長です。林先生は龍谷大学の学部および大学院に学ばれ、国立民族学博物館、京都大学東南アジア研究センターを経て、京大地域研にお勤めです。専門分野は東南アジア民族誌学、文化人類学、宗教と社会の地域研究です。ご存じの方は多いと思いますが、京大地域研は地域研究コンソーシアムの中心でもありますし、またセンターの共同研究として比較研究、さまざまな地域研究を展開されておりますので、そのご経験、観点からコメントをいただけるかと思えます。それでは15分ぐらいでよろしく願いいたします。

○林行夫（京都大学地域研究統合情報センター長） どうもありがとうございます。今日のご発表の内容を知るにも、すべて資料がそろったのが今日の午前でして、皆さんもこの3つのご報告を今日お聞きになってお感じになったように、1つの国の1つの地域についての話だけでもなかなか難しいのに、それを軸足にして、そこからさらに展開するという議論ですので、はっきり申し上げまして、コメントをどうしろと言うんだというところがございます。

僕もさん付けで呼ばさせていただきます。今、宇山さんからお話がありましたように、自分の組織ではそういう共同研究をたくさんやっているだろうと。そしてまた、今では全国で97ぐらいの組織が参加している地域研究コンソーシアムの事務局をやっているのだから、何かそういう観点から物を言えということでしたけれども。

まず今日お話を3つ、私もライブで伺ってしまして、2つは組織ぐるみで非常に大きな比較研究のプロジェクトをされていて、そのご報告でした。そしてご自身はいみじくもつなぎだとおっしゃいましたけれども、黒木さんは6年にわたる長い科研を自分で取られて、移民の比較研究をされているという、そういう構成であったと思えます。

藤原さんと田畑さんのお話は、プロジェクトの概要、およびこれからどんどん本が出ていくという、大変うらやましい状況がPRされましたが、最初の2つのご報告を聞いていて、いみじくも今日のシンポジウムのタイトルとは逆の言葉が出ました。それは地域研究、比較研究の苦しみというものです。そこが私は非常に印象に残りましたし、実はこの研究の、今日のシンポジウムのタイトルをいただいたときも、愉しみというのが一方にあって、苦しみがあろうということを思いました。

そういう意味で、3つ目の田畑さんのご報告は、あまり苦しみの表情がなく、非常にクリアに比較の成果が出ていた。いみじくも田畑さんはおっしゃいました。地域研究者は自分の専門ばかりやって、俺は特殊なんだ、特殊なんだと言って、そこからなかなか前に進まない。しかしながらその相同性、同じところを見ていけば、いろいろなものが見えてくるだろう。さらにおっしゃいました。そこからさらにもっと深いところでの違いが見えてくるはずだと。これは、見事に成功されているプロジェクトとお見受けいたしました。そ

れを自分なりに一生懸命咀嚼するに、たぶんこれは経済学だからなのかなと。すなわち、あらゆるインデックスというものが比較の枠組みといますか、そういう単位というものがわりに出そろっていて、そこで相同性を見つけやすくなっているのかなと。

比較研究という問題そのものを考えますと、今日はお見受けするところ同業者ばかりなので、あまり一般向けのコメントをするのもなんですけれども、人間というのは常に比較して生きていくと思うんですね。そして比較の愉しみというか、自分はこうなんだということと言う前に、あいつはどうなんだ、あいつはどうなんだとって、比較しながら生きていく。そういう意味では、日常生活の中で比較の試みというのをみんなやっている。

同時に、その比較をやっていくのが地域研究です。今地域研究というと、文科省の方は何か日本の地域おこしの研究ですかという方も本当にいらっしゃるのですが、私たちは海外に行くと、おのずから自文化、自分の生まれ育った環境と、今出会っている、直面しているまさに他文化、異社会の状況と向き合うわけですから、常に比較研究のベースはそこにある。

ただ、それが学問としてどのように成熟、あるいは制度化していくかといいますと、やはり昔前の比較というのは、もうすでに到達点として 1 つモデルがあって、そこにどれだけ遅れているか、ずれているか、達成しているかという進化論のようなものがあった。最終的にはみんな産業社会になる、宗教も全部一神教になるんだという議論があって、ここは多神教で遅れていますねとか、このことだけを取り出して今から見ると、何か非常に荒唐無稽な話に聞こえますけれども、実はこの見方というのは、まだどこかで我々もやっているように思うんです。

例えば、私どもの地域研究統合情報センターで進められている共同研究の 1 つに、新自由主義の展開というものがございます。主宰者の村上勇介さんも苦労して頑張っておられますが、すみません、私は政治学、経済学じゃなくて文化人類学専門なんですけど、見ておりますと、やはり 1 つの図式があって、そこにどこまで到達しているのか、ずれているのかという、これもある意味で昔の進化論的な図式を使った比較ではないかと思うわけです。

今日の 3 つのご報告を拝聴して思い浮かんだことは、そういった進化論的な図式、あるいは 1 つのモデルがあって、そこからどれだけずれがあるのかという比較ももちろん成功するけれども、もう 1 つ今日出てきたのは、やはり田畑さんの言うような相同性を見つけられていて、さらに違いを深めていってという見方です。最初の藤原さんのご発表にありましたが、第一次世界大戦がずっと尾を引いていて、次々に課題が生まれてくるという、この局面だけ見ると非常に楽しい展開になっていると思いますが、いざデータを比較し始めようとする、最も楽に見えたもの、つまり統計資料が、人文系の場合、実は大変扱いにくい。これは私どもの共同研究でも経験していることです。

統計そのものの意義というのはそれぞれありますけれども、例えば私が専門としている国のタイでも、宗教人口、仏教人口などが出ているのですが、行政区レベルからずっと積み上げていくと、総合数と全然違ってくる。毎年出る統計は同じようにやっているけれど、

全部違ってくる。こんなことはもう日常茶飯事のようなところがあります。ですから、統計というのはそういう位置付けなんだという形で使っていくのですが、厳密な比較ということを考えるときに、その辺はかなり留保していかざるを得ない。こういう技術的な問題ももちろんあります。

それから藤原さんのご発表で非常に印象に残ったのが、何を比較対象とするかというお話の延長だと思うんですけども、比較をしていくと、まったく今まで考えていた研究では思い付かなかったものがつながっているという、その関係性というのでしょうか、比較をしていく中で見えてくると。例えばさっきもおっしゃっていましたが、小牧近江さんとおっしゃる方ですか、私今日初めて、すみません、勉強不足で。こういうのが、まさに第一次世界大戦の恐慌、それから日本の状況とつながっていて、文字通りシソーラスにつながっていくというんでしょうか。そういう局面はやはり非常に参考になりました。いわゆる思想交流、比較研究をやる中で生まれてくる思想交流というのは、かつてからもよく議論されていたところだと思いますが、そういうものが今回もまさに生かされて研究されていると思うわけです。

ただし藤原さんのお話を聞きながら、第一次世界大戦が始まってちょうど100年だから、こういうタイムリーなご研究をされているのかなと思うのですが、その一方ではまさに、第二次世界大戦の記憶を持つ人がどんどん亡くなっていく。もうほとんど、戦艦大和に乗っていた乗組員はあと2人しか残っていない。あれだけの空爆を受けて生き残った人は少ないのですが、そのことを知っている人も2人だということで、やはりこういう戦争というものを扱われた場合、比較研究の対象としてやられるときの、生きている人の記憶の回収といったものは、おそらくついて回るだろう。それに、もしかしたらこの問題というのは、国を越えてやる比較研究だけではなくて、むしろ1国の中でも起こる。世代の違い比較研究といいますか、おそらく第二次世界大戦を経験した人と、私のように高度成長期に生まれた人間では、全然違う世界を生きていて、さらに最近のことですけれども、震災の被害を受けられた方とそうじゃない方、これがまたずれを見せていく。何かそういう形での、1国の中にあっても地域研究がなすべき役割があるのではないか。実はそういう観点から、災害とか洪水の問題を取り上げている研究なども、地域研究コンソーシアムでは進展しております。

あちこち飛び地に行くようになりますけれども、私としては比較研究というのは必定です。たぶん人間が研究者としていろいろなものを対象にして研究するときには避けて通れない。問題はその比較の尺度と対象。それからJCAS（地域研究コンソーシアム）および地域研の27走っている共同研究でもそうですけれども、比較をする最終的な構えというのは、ある若い人がよく言うのですが、固有名詞を取ってしゃべれと。これはある意味で地域研究をやっている人間からすると、非常に矛盾した立場に置かれるわけです。

地域研究をやっている人間は、個性とか固有性というものを考えて動いている。それを、例えば東南アジアをやっている私などは、たぶん初めは日本との比較においてやっている

だろう。今は同じ地域の中で違う国同士を比べてやっている。そういう比較はやっているのですが、これを伝えるときに、文脈を外して固有性を括弧に入れて比較するという、そういう試みをやっています。これが、実は2つの局面において大変苦しい、難しい。

1つは固有名詞を避けると、まず、ほとんど言葉をしゃべれなくなるような研究者も出てくる。つまり課題というものに対する透徹性といいますか、自分に対する見識の深さというもの、そういうものがなかなか見つけにくい。これをやるためには、やはり地域の異なる専門家が相互学習することによってしか見つけられない。これは時間がかかるんです。特に同じような人文系の人ほど、しかも近いような地域をやっている人ほど、実は遠いんだということが、私がこのごろ経験するところです。文理融合といったものを、今京都大学なんかよくうたいますけれども、その前に文文融合がまず進められるべきところがある。まさに互いを理解するための相互学習が、比較研究には必要ではないか。

あと1点、この比較研究の成果はどこに向けられるのかという大事な問題があると思います。すなわち、一生懸命比較する、でもそれはまず研究者コミュニティーの中で行われます。そしておそらく、藤原さんの場合もそうでしょうが、ドイツの方などをたくさん入れて、一流の研究者を含めて研究発表されると思うのですが、これはアカデミクスの1つのプラクティスといいますか、1つの形だと思います。しかしながら、同時に、果たしてその見つかったものが、研究者を超えて現地に還元するとか、そういうことになってくるとどういった問題が起きてくるだろうか。これは、今私どもがいる地域研でも問題になっているといたしますか、悩ましいところです。

個人の来歴や、移動の歴史をずっと追って、10年間というふうに人々は東南アジアの仏教の寺院を動いたかということ、私は6年ぐらいずっとやっているのですが、これをやっているうちに、だんだん個人情報の問題で、もうタイやカンボジアでは発表できなくなる。そうするとコードを全部変えなくてはいけなくなる。あるいは、もう全然違う公表の仕方をしなくてはならなくなる。

研究者仲間のコミュニティーで成立する比較研究というものは、おそらく正しいやり方だし、今までの伝統的な地域研究をさらにブレークスルーするあり方だと思うのですが、これが今度現地の人々に向かったときに、有名な方々ばかりだったらいいですが、無名な方々を取り込んでやろうとする地域研究の場合、モラルの問題や肖像権の問題等々を含めてあるわけで、これをどういうふうに解消していくかというのが、今後の比較研究のあり方として課題になるのかなと思います。

その他たくさんございますけれども、最後に1つだけ質問に代えさせていただきますと思います。田畑さんのご発表のところですけども、今回の比較研究のご成果としては非常にクリアに見えたのですが、ぜひお聞きしたいのが、経済以外では、5つぐらいグループがあったと思うのですが、いったいどのような方法で苦しみと愉しみが生まれているのかということをお聞かせいただければ幸いです。時間がもう来ていますので、ありがとうございます、失礼いたします。(拍手)

○宇山智彦 林先生、大変多岐にわたるコメントをどうもありがとうございました。お聞きしながら本当にいろいろ考えさせられましたけれども、確かに一昔前の、ここは進んでいてここは遅れているとか、あるいは何か特定のタイプにいろいろな地域を分類しようとするような比較ではない方向性を、近年の研究は出しているわけで、その中で比較と関係性というのがキーワードの1つだろうと思うのです。

最後のご質問に何パーセントかだけお答えすると、私たち歴史の班では、帝国間、あるいは帝国と植民地の間の関係の結び方がいろいろな地域で同じなのか、違うのかということに関心を持って進めていて、そうすると、帝国の中央の姿を見るとかなり違って見えるロシア帝国とイギリス帝国でも、結局権力と現地社会の出会いという観点から見ると、かなり共通性も見えてくるということがありました。そういった関係性を重視する比較が、おそらく固有名詞を取った比較ができるのかということと結び付いていて、いろいろな社会の間、権力と社会の間のあるべき関係を一般論として語れるのか、そういったものにやはりそれぞれ固有の文脈があってこそその話なのかというのは、本当に深く考えなければいけないところだと思われました。

すぐに3人の報告者のお話を聞きたいところなのですが、あと20分に迫っております、フロアにいらっしゃる方々もいろいろご意見、ご感想をお持ちだと思いますので、フロアからご質問、ご意見を出していただいた後、3人の方々にまとめてお答えをいただくことにしたいと思います。ご自由にお出しいただければ幸いです。いかがでしょうか。全体的な話でも、個々のご報告に関する話でも構いません。

○濱口伸明（神戸大学経済経営研究所長） 日本では地域研究の非常にリッチな蓄積があると思いますが、その成果は、どの程度国際的に発信されているのかというところをお教えいただきたいと思います。特に今回は大規模に研究をしておられる成果をお聞かせいただいたのですが、こういった貴重な成果を、どういう形で世界的に発信されているか、現状を教えてください。お願いします。

○宇山智彦 ありがとうございます。ほかにご質問、ご意見ありますか。それでは3人の方々にお返事をいただきたいと思います。新たな問題提起を含めていただいても結構です。1人5分をめぐりにお願いいたします。それでは藤原先生。

○藤原辰史 林先生、ありがとうございます。まず第一次世界大戦研究から見たときの進化論的研究に対する1つのアンチテーゼとしては、やはり同時代性というところを我々はかなり注視していきたいと思っています。それは交通や郵便やその他、いろいろなインフラの問題もありますが、ヨーロッパからすればものすごく遠い場所にあるはずの日本が、ほぼ同時にメディアなどを通じて第一次大戦を体験した。あるいは、単に情報を得ていた

だけではなくて、同時に生きている人々の世界観みたいなものも変わっていくというような、まさに空間的な把握というのでしょうか、時間的な把握だけではなくて。そういうところからすると、やはりイギリスモデルに対する、それに遅れてきたドイツというかつての枠組みも、もう少し相対化できるのではないかという捉え方で、私どもは見ていきたいと思っています。

記憶の問題では、これは本当に、第一次世界大戦でさえシビアな問題でして、今、第一次大戦の欧米の研究書などを読みますと、モニュメントとかコメモレーションとか、そういったぐいの本がたくさん出てきています。聞き取りはもう厳しい状況ではあるのですが、それでもやはり当時の戦争の日記と、手紙、軍事郵便などを取り上げながら、研究がかなり進んでいる状況です。それは必然的にその家族とか、生きている家族とかのプライバシーにも関わってくるということで、いつも突き付けられている問題です。

もう1つ重要なのは、最近、ドイツとフランスの間で共通教科書という形で第一次世界大戦の共同教科書ができたんですね。それはいわば歴史的な和解という意味も込められていますけれども、ただ問題なのは、その教科書はドイツ対フランスという、第一次世界大戦が基本的には西部戦線だったという史観がどうしても入ってしまう。

そうではなくて、実は先ほどの視野の話でもありました通り、第一次世界大戦がもっとコメモレーションされるべき場所はいっぱいあって、それは中東なども第一次大戦の遺産がやはりあのような形で、紛争の火種をずっと残してきているわけですし、第一次世界大戦の記憶ということを考えるときでも、記憶が処理あるいは整理されていく地域との格差というのがやはり重要ななと思っています。そういう意味での記憶、コメモレーションの比較研究というのも重要なテーマになってくるのではないかと思います。

それから国際的な発信の仕方ということですが、私どもが1つ関わっているのは、第一次世界大戦のインターネット百科事典というのを、ヨーロッパの研究者が中心となって作ってしまして、それに山室さんがエディターとして関わられています。つまり知の共有として、インターネット空間を通じて第一次大戦の研究を広めていこうと、そういうものにも人文研の共同研究班は関わっております。

また、先ほど言いましたように、シンポジウムラッシュがもうそろそろ始まりますので、そういうところに行ったり呼ばれたり、日本で開いたりという形で、とにかく場数を踏むというか、いろいろな場所で、日本の研究の今までやってきたことなど、皆さんに批判していただきながら、対話を深めていけたらと思っています。

しかしながらそれはやはり研究者だけの世界にとどまりがちですが、一方でやはり戦争、第一次大戦研究をやっていくとどうしても、社会史だけではなくて、人々の暮らしの歴史まで関わらざるを得ない問題で、そこが変わったということ、私たちがどうしても突き詰めていきたい。そうなってくるとやはり比較研究を単にアカデミズムにとどめておくというのはすごくもったいない。

そういう中で、例えば一般の方をもウェルカムという形での、「人文研アカデミー」とい

う一般向けの講座を開いたりして、そこで大戦の研究を還元することによって、いわばアカデミックと社会、それ以外の方々との対話も深めていけたらと思っています。大戦自体が何でものみ込んでいく研究テーマである分、私たちもそういう覚悟の下で研究を進めていかなければという気持ちを新たにしましたところです。どうもありがとうございます。

○宇山智彦 ありがとうございます。黒木先生。

○黒木英充 林さんの非常にポイントを突いたお話を伺いながら、私もいろいろ触発されました。今日は取りあえず比較を1つしてみただけでしたが、今考えておりますのは、世界各地に名もない人たちが散っていくとき、そこでいわば何気なく成し遂げていたグローバル化の側面に注目したいのです。

先ほども申しましたように、数千キロ離れていながらも同じような仕事をしながら、同じように社会上昇を遂げていく、というその過程ですね。報告の中では端折りましたが、移民たちは怪しげな十字架を持ってきて、「これは聖地から来たありがたい十字架である」といって、フィリピンで売り、ブラジルで売り、オーストラリアで売り、北米で売ります。「こんなものが売れるらしい」という話が移住する前の社会で流布していたのかもしれませんが。これは歴史学的には実証はしにくいことで、いわゆる行政文書にはなかなか出てこない内容です。しかしそういう経験・記憶といったものを丹念に拾ってあげたいと思います。

それと同時に文学ですね。藤原さんや田畑さんの共同研究のお話にも関係しますが、いわゆる移民文学というのが、1つのジャンルとして確立しておりまして、移民の作家、多くの場合2世、3世の作家が、親の経験をそのまま、あるいはそれをさらに咀嚼した上で作品に生かすというようなことが行われています。そういう文学者たちとの交流を、今後もこの科研のプロジェクトの中で行っていきたいと思っています。

このような形で、人々が発信することを我々が受け止め、そのうえで、それを相互にまさに比較した上で新たな枠組みが作れるのか作れないのか、ということですね。その意味での成果の国際発信ということですが、移民の方々といろいろ話をしますと、「それでお前たちはそれをいつ本にするんだ」と、尋ねられるわけです。陸続と報告書を出しておられる藤原さん、田畑さんのプロジェクトと比較されると、非常に肩身が狭いですが、外国語で、英語になるとと思いますが、いずれ出していきたいと思っています。

移民、特にアラブのレバノン・シリア関係の移民にかかわる国際的な雑誌が新しく最近できましたし、移民研究センターといったものが世界各地に実はあって、情報を蓄積しています。そういったものをつなぐような役割を、こちらからもできればと思っているところです。

もう1つ、レバノンの人たちを見ていると、日本ではやれ国際性が大事だとか、もっと外に出ていかなければとか言われていますが、そんなことはもう当たり前に行われている



わけですね。その生きている人たちの経験というものを、いわば国際発信と同時に国内、日本社会の中にも、積極的に紹介していく必要があるだろうと感じます。

○宇山智彦 田畑さん、お願いします。

○田畑伸一郎 どういうふうに答えていいのか分かってないのですが、やはり比較を押し進めていけば、何か一般化あるいは一般論みたいなものを引き出すとか、経済の比較についてもそういうところまでいければいいのかなとは思っています。例えば何か法則性を見つけるとかですね。

我々の研究でも、要するにこういう地域大国が、今の欧米のモデルに代わる、何らかの新しいモデルを提供しているのかというような問題設定もしたのですけれども、そういうことについては明瞭に何か答えを出しているわけではないですね。例えばロシア、中国、インドというのは、先ほども言いましたように、国が経済に非常に大きく関与するという共通性を持っていますが、では、そういうものは、どの程度世界的に見て一般化できるのか。

1つの例を出せば、ナショナルチャンピオンのような企業というのが各国にあるわけですね。日本でいえばトヨタだとか、そういう企業と国との関わりを見たときに、こういう地域大国と欧米との間にどのような差があるのかといったようなところは、まだまだこれから考えなければいけない、そういう一般化みたいなところまで進めばいいなと思っているだけという感じです。

結局のところ地域研究というのは、どこまでいってもやはり、どこかに残っている各国の固有性とか独自性を明らかにするところが、取りあえずの目標ではないかとは思っています。比較については、要するに、経済と政治は、比較政治とか比較経済とかという学問がそれなりに成立してきたので、比較が容易に見えているのかなという気はします。

経済以外の5つのところでどういうふうになっているかについては、この会場に各班のメンバーが大体1人ずつはいますから、その人に代わりに答えてほしいぐらいですけれども、非常に苦しんでいるところがたくさんあるのは確かです。今後成果を各班が1冊ずつ出すことになっているので、それがどういう時期にどういう形で出てくるかを見ながら判断していただきたいと思っています。

国際的発信についていうと、もちろん国際シンポだとか、国際会議での報告とかいろいろなことをやっていますが、1つ思っているのは、我々がやったこの3国比較というのは、世界的にも初めてではないかと言いましたけれども、では世界的に非常に優れた方法だとして受け入れられているかということ、まだその辺はよく分かっていません。要するに、3国を比較しなければ分からなかったことは何かというような問いを突き付けられたら、明確にどう答えるかというのは、考えなければいけない。それなりに国際的に発信をしてきたつもりですけれども、そこまで受け入れられるようになっていくかということについて

は、まだ確信していない。これから英語でも本を 1 冊出そうと、今まさにもがいている、そういう状況です。

○宇山智彦 ありがとうございます。田畑さん、ご自分ではおっしゃらなかったですが、*Eurasian Geography and Economics* という国際的な雑誌で、ロシア、中国、インドの比較というテーマで特集号を出したんですよ<sup>7</sup>。それからプロジェクトの準備段階で開催した、比較を意識しながらロシア帝国のアジア部分の歴史を論じるというシンポジウムの成果は、イギリスのラウトレッジから私自身が出しています<sup>8</sup>。

これは比較研究に限った話ではなく、国際的発信の一般論として考えることですが、スラブ研究センターで出している英語の出版物は、基本的にウェブサイトで全部見られるようにしていて、関心を持った人は気軽に読んでくれます。しかし、そういうものが出たという情報は、やはり海外の一流出版社から出た本の方が伝わりやすい。私がラウトレッジから出した編著は、センターで出した出版物を超えるレベルで、高い評価の書評がいろいろな国際的な雑誌に出たのですが、反面值段が高いので買ってくれない、一般読者が買ってくれないという問題がありまして、国際的な発信の方法については、いろいろ試行錯誤しています。それも苦しみの中の 1 つではあります。

今日、比較研究の愉しみと苦しみについていろいろお話がありました。去年のシンポジウムのタイトルが「連携する研究所」でしたが、比較研究ということを考える場合にも、当然 1 つの研究機関の研究者だけではできない、いろいろな連携をしないとイケない。文文融合というか、文文連携をしないとイケないわけです。今日の話の中で、どこのどういう研究者がどういう研究をしているのかという情報を、いろいろ得ることができたかと思えますので、ぜひ今後皆さんの大学、研究所で、比較に関わるいろいろな研究をするために、そういった情報を生かしていただければと思っております。

それではこれでシンポジウムを終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

---

<sup>7</sup> Thomas G. Rawski, Tabata Shinichiro, Marukawa Tomoo, and Sato Takahiro, "Symposium: Japan's Economic Relations with China, Russia, and India," *Eurasian Geography and Economics* 53, no. 4 (2012), pp. 419-478.

<sup>8</sup> Uyama Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* (London: Routledge, 2011).